特集解説 人文・社会科学におけるあいまいさの取扱い

「人文・社会科学におけるあいまいさの取扱い」 を企画して

和多田 淳三 *

ファジィ集合理論が提案されて 30 年近くになる。当初からファジィ理論の研究や工学的な応用が行われてきた。特に 1987 年の日本での国際ファジィシステムシンポジウムから産業界の関心が非常に広がった。関心の中心はおもに工学的応用で特にファジィ制御に焦点が当てられていた。

最近、心理学や経営学、社会学などの分野での応用が評価や多変量解析にファジィ手法を用いた方法論が導入されるようになり、ファジィ手法やファジィモデリングに関心が高まってきている。日本ファジィ学会の唯一の人文・社会科学を包含する研究会であるノンエンジニアリング研究会では、最近経営や法学、社会学での研究が多く発表されている。そのワークショップや日本ファジィ学会のファジィシステムシンポジウムでも人文・社会科学の幾つかのセッションを組むことが出来るようになっており、研究発表が活発化してきていることを示している。

このような動向を踏まえて、この特集号では人文・社会科学の各領域でのあいまいさの考え方に
ついてそれぞれの分野の研究者に解説して頂いた。

しかし、領域が広範囲に渡っているために、幾つかの活発に研究が行われている分野を割愛せざるを得なかったり、重要であるが研究者が少ないために特集の対象としえなかった分野など、今後の再特集が待たれるほどである。例えば、教育の分野は活発に研究が行われている。特に評価の分野で多くなされているが、今回は割愛せざるを得なかった。法学の領域も重要な領域であるが割愛した。

1993 年 6 月号での人文・社会科学論文特集はすでに多数の論文投稿を受け付けており、研究の現状を知る上で重要となるであろう。

これを契機にこれらの領域の研究が今後いつそう活発になり、心理学分野での多変量解析の応用が多変量解析そのものの研究を押し進めたように、人文・社会科学での研究がファジィ理論を突き進める力になることを願っている。あいまいさが議論されなければならない領域は人文・社会科学にこそ存在するであろう。

* Junzo WATADA
大阪工業大学 工学部経営工学科
Osaka Institute of Technology